

文法項目の配列・提示に関する一考察

広島大学大学院

森 千 鶴

はじめに

文法項目の配列・提示は、特に初級の段階で問題にされる事柄であると思われる。中学校の段階では、毎回生徒にとってまったく未知の文法項目を提示してゆくわけだから、生徒にとって理解しやすい配列を考慮する必要があると思われる。本稿では、以上のような問題を学習者の困難点という問題とかかわらせて検討してゆく。

1. 教材作成における配列

Howatt (⑥: 11 - 16) は、教材作成の際の留意事項を3つあげ、そのひとつとして in which order つまり配列の問題をあげているが、配列ということの果たす役割とは何であろうか？それは、秩序正しい入力によって学習困難を軽減することであると考えられる。そこで教材を作成する側は、生徒にとっての学習困難点がどこに存在しているかを正しく見きわめることが何よりも大切な仕事となってくる。つまり、学習者にとっての困難点がどこに存在しているかを考えてみる必要があるが、これについて Howatt (*ibid.*) は、まず学習者の母国語と目標言語との相違から生ずる Mother tongue interference をあげている。さらに、これ以外で学習困難をひきおこす要因として以下の6つをあげ、検討している。

1. diffuse concepts
2. problems of class assignments
3. exceptions
4. apparent anomalies
5. complexities
6. meaningless choices

まず、1の diffuse concepts であるが、これは英語の冠詞や完了形などのように、それ自体が複雑で明解に記述したり説明したりしにくい項目をさしている。2の problems of class assignments については、たとえばフランス語の名詞の gender や、英語において目的語に不定詞をとるか動名詞をとるか、などのようにクラスに分けて覚える必要のあるようなものをさしている。3の exceptions は、文字通り例外のことで、たとえば go の過去形が goed にならずに went になるなどのことをさす。4の apparent anomalies については Howatt の言葉を借りれば、“By anomalies I mean unexpected features of a language,” ということ、たとえば英語における三人称単数現在の s などの inflexion をあげている。5の complexities に関して Howatt は2種類を考えており、ひとつは正しい文をつくり出すために一度に多くのルールを適用しなければならないようなもの、たとえば Where does your father work? という正しい文をつくり出すために、学習者はまず主語の前に question-marker の ‘do’ を置き、さらにそれを主語に一致させて does に変えなければならない。第二の complexity とは、多くの可能性の中から正しい選択をしなくてはならないような場合で、たとえばフランス語の半過去といわれた時に条件法や未来形と混同せずに正しい形を

選択しなくてはならない。最後の *meaningless choices* というのは、たとえば *be fond of, be interested in, on purpose* などに見られる前置詞の使い方のことで何ら *semantic implication* を持たない *grammatical choice* をさしている。

以上のように6つの困難点をあげたのち、Howatt は配列によってある程度その困難を軽減することができるのは、*mother tongue interference, diffuse concepts, complexities* であると指摘している。以上のような考察によってある程度まで学習困難点の所在を明らかにすることができたが、実際に教材を作成する場合はより細かい点まで予測をし、対処していく必要がある。単なる経験やカンだけでなく、より確かな方法で学習困難点を予測・発見するにはどのような方法が考えられるだろうか？

2. 学習困難点の予測・発見について

これまでの考察で、学習困難をひきおこす要因として *mother tongue interference* と目標言語そのものが持つ固有の複雑さがあることが明らかになった。このうち前者、すなわち *mother tongue interference* は、母国語と目標言語間の *contrastive analysis* によってある程度まで予測可能であると思われる。ここで *contrastive analysis* , すなわち対照分析の予測性と限界について考えてみる必要がある。

対照分析の結果を教材の作成にとり入れるという考え方は、古くは Fries (④: 9) における「最も効率的な教材は母国語の対応する記述と注意深く比較された目標言語の科学的記述に基づく教材である。」という一文にうかがうことができる。この考え方は Fries の後継者である Lado によって推し進められていったわけであるが、このような考え方は構造上の相違が大きければ大きい程、学習の際の問題が大であるという基本に成り立っていた。しかし、容易に推察されるように、このようにして予測された困難点は必ずしも実際に学生がおかす誤りとは一致せず、多くの *error analysis* 専門家から反論を受ける結果となった。

確かに対照分析を行ない、母国語と目標言語間の構造上の相違が大きければ大きいほど学習者にとって困難が増すという考え方は、あまり単純であると思われる。というのは、構造ということに着眼した場合に、1で考察したように母国語との相違による困難以外にも目標言語の構造そのものが持つ *complexities* が存在しているからである。しかしながら、それだからといって対照分析には全く予測性がないとは言いきれない。問題なのは、分析の方法であろうと思われる。対照分析の記述モデルには、変形文法に基づくものや成層文法に基づくものなどいろいろ考えられるが、Buren (②: 279 - 294) は *structuralist approach, transformational-generative account* そして *national approach* の3つについて考察し、外国語教育に最も貢献するのは最後の *national approach* ではないかという結論を出している。この *national approach* というのは、*I have been waiting for six hours.* という現在完了進行形の文とフランス語の *J'attends depuis six heures.* とを比較する場合に、文の表面的な構造や変形規則を比較するのではなく意味内容に着目して比較するという方法である。まず英語の現在完了進行形を分析・検討し、それと等しい概念を表わすフランス語すなわち *J'attends depuis six heures.* という文を検討する。つまり英語では *present tense* と *perfective continuous aspect* の組み合わせプラス *since* で表わすところを、フランス語では *present tense* プラス *depuis* で表わすということになる。外国語教育に必要なのは純粋に理論的な対照分析よりも、上記のような概念に重点を置いた分析であると思われる。

以上のところまでで対照分析の予測性と限界について考察してきたが、1でみたように学習者にとっての困難は *mother tongue interference* 以外にも多くの要因が考えられるわけであるから、

対照分析による予測だけでは当然のことながら不十分なところが出てくる。そこで考えられる方法が error analysis (誤りの分析) である。誤りの分析は中間言語の研究と深く関わっているが、どの点において誤りが起こりやすいかを調べることによって困難点の所在を明らかにすることができると思われる。すなわち対照分析と誤りの分析は Nickel (⑨: 11) がまとめているように、お互いに排除しあうものではなく相補的な関係にあると考えることができる。このことは誤りの分析の立場からは次のように考えられている。たとえば Richards (⑩: 182) は誤りの種類を (1) interference error (母国語の干渉による error), (2) intralingual error (目標言語内の干渉による error), (3) developmental error (学習者が目標言語の特徴を誤って解釈したことによって起こる error) の 3 種類に分け、このうち対照分析によって予測が可能なのは(1)の Interference error だけで、残りの 2 つは誤りの分析によって明らかにされると述べている。

3. 学習困難点と配列

最後に残された問題は、対照分析や誤りの分析によって明らかにされた学習困難点をいかに軽減してゆくかということである。1 ですでに考察されたように、すべての困難が教材配列や提示のしかたで軽減されるわけではない。しかし、母国語による干渉や目標言語内の相互干渉の一部は、ある程度までは教育学的な配慮によって防ぐことができると思われる。たとえば生徒にとって認識しやすいものから教えていく、また困難度の大きいと思われる項目は一度に多くを提示するのを避けて、時期を追ってくり返し提示する、他の項目と有機的な関連を持つように提示する、また解りやすい場面、適切な場面の中で提示していくなどの配慮である。何よりも危険なことは教える側の論理のみで教材を作成することだと思われる。諸国 (⑩: 56) の言葉を借りれば、「『単純なものから複雑なものへ』という原則は、コメニウス以来教授学においても古くから認められている。しかし、この原則は、科学の体系におけるそれとは同一なものではない。なぜなら、科学の体系にみられる論理的な『単純なもの』『複雑なもの』はいつも教授学的な『単純なもの』『複雑なもの』とはいえないからである。… 教授は、教師の側からみれば子どもたちに、科学の論理的な体系を伝達していく過程であるが、子どもの側からみれば、授業はなによりも認識過程なのである。」ということになる。つまり学ぶ側には学ぶ側の論理があり、教える側はそれを十分にふまえる必要があるということであろう。

おわりに

教材を作成する場合の配列・提示に際しては、学習者が直面するであろう困難点を見つけ出し、それを軽減するように努める必要があること、またそのためには学習者の学ぶ側の論理をふまえる必要があることなどについて論じてきた。ただ今回の発表では、全体的な概論に終わってしまい、「認識しやすさの基準とは何か？」などの具体的考察までにはいたらなかった。今後は、この点を発展させ、より具体的な方向へともってゆきたいと思う。

REFERENCES:

1. Allen, J. P. B. and Corder, S. P. (eds.) (1974), *Techniques in Applied Linguistics*. (The Edinburgh Course in Applied Linguistics VOL. 3) London: Oxford University Press.
2. Buren, Paul Van (1974), "Contrastive Analysis," Allen, J. P. B. and Corder, S. P. (eds.) (1974: 279-312)
3. Dušková, Libuše (1969), "On Sources of Errors in Foreign Language Learning," *IRAL*, 7, 1, pp. 11-36.
4. Fries, Charles C. (1945), *Teaching and Learning English as a Foreign Language*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
5. Hammarberg, Bjorn (1974), "The Insufficiency of Error Analysis," *IRAL*, 12, 3, pp. 185-192.
6. Howatt, Anthony (1974), "The Background to Course Design," Allen, J. P. B. and Corder, S. P. (eds.) (1974:1-23)
7. Lado, Robert (1957), *Linguistics across Cultures*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
8. Nickel, Gerhard (ed.) (1971), *Papers in Contrastive Linguistics*. Cambridge University Press.
9. _____ (1971 a), "Contrastive Linguistics and Foreign Language Teaching," Nickel, Gerhard (ed.) (1971:1-16)
10. _____ (1971 b), "Problems of Learners' Difficulties in Foreign Language Acquisition," *IRAL*, 9, 3, pp. 217-227.
11. Richards, Jack C. (1971), "A Non-Contrastive Approach to Error Analysis," *ELT*, 25, 3, pp. 204-219.; page references are to the reprint in Richards, J. C. (ed.) (1974:172-188)
12. _____ (1974), *Error Analysis; Perspectives on Second Language Acquisition*. London: Longman Group Ltd.
13. Schachter, J. and Celce-Murcia, M. (1977), "Some Reservations Concerning Error Analysis," *TESOL Q*, 11, 4, pp. 441-451.
14. Sciarone, A. G. (1970), "Contrastive Analysis - - - Possibilities and Limitations," *IRAL*, 8, 2, pp. 115-131.
15. Wardhaugh, Ronald (1970), "The Contrastive Analysis Hypothesis," *TESOL Q*, 4, 2, pp. 123-130.
16. Whitman, R. and Jackson, K. (1972), "The Unpredictability of Contrastive Analysis," *LL*, 22, 1, pp. 29-41.
17. Wolfe, David L. (1967), "Some Theoretical Aspects of Language Learning and Language Teaching," *LL*, 17, 3&4, pp. 173-188.
18. 諸岡康哉 (1977) 「教材の選択と配列」, 吉本均 (編) 『現代教授学』 (1977: 47 - 60) 東京: 福村出版